

〈今月の紙面〉

- ・「食料・農業 知っておきたい話」88—(2面)
- ・チーズ総消費量、5年連続で最高更新(3面)
- ・08~18年調査 レタスの購入量が増加傾向(4面)
- ・ハウス栽培の台風対策(5面)
- ・初産牛 分娩後体重上限650kg、一乳期高米糞で(6面)
- ・黒毛和種 ゲノミック評価高い個体が成績良好(7面)
- ・畜産物需給見通し(8面)

開拓情報

発行所
 公益社団法人全国開拓振興協会
 〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13
 TEL 03-3586-5843
 FAX 03-3586-5846
 ホームページ http://www.kaitakusya.or.jp
 全日本開拓者連盟・全開連・全国開拓振興協会共同編集

19年度カロリー・食料自給率38%

1ポイ上昇も低水準が続く

直近5年の食料自給率等の動向 (%)、万ha

| 年度 | 2015 | 2016 | 2017 | 2018 | 2019 | 2030目標 |
|---------|------|------|------|------|------|--------|
| カロリーベース | 39 | 38 | 38 | 37 | 38 | 45 |
| 生産額ベース | 66 | 68 | 66 | 66 | 66 | 75 |
| 飼料自給率 | 28 | 27 | 26 | 25 | 25 | 34 |
| 農地面積 | 450 | 447 | 444 | 442 | 440 | 414 |

農水省は8月5日、19年度の食料自給率及び食料自給力指標を公表した。カロリーベースの食料自給率は前年度から1ポイ上昇し38%となった(1人1日当たり供給熱量2426キロカロリーのうち、1人1日当たり国産供給熱量は918キロ)。前年度を上回ったのは、08年以来11年ぶり。だが、過去最低水準だった前年度からの上昇は小幅にとどまり、依然として低水準が続いている。

カロリーベースの自給率 生産額ベースの自給率は、米の消費減少や魚介類の不漁がマイナス要因となったが、好天による上昇や小麦の生産量の増加がプラス要因となった。加がプラス要因となったが、野菜の増収に伴う単

価下落や魚介類の不漁などが影響した。品目別の自給率(重量ベース)は、米が前年度と同じ97%、小麦は4ポイ上昇の16%で、大豆は前年度と同じ6%にとどまった。野菜は1ポイ上昇の79%、果実は前年度と同じ38%だった。

飼料自給率(TDN)可消化養分総量)換算で算出は、前年度と同じ25%だった。国産畜産物の増加による飼料需要の増加に対し、前年度に比べて天候被害の発生が少なかつたため、国産飼料もやや増加した。うち、粗飼料自給率は1ポイ上昇の77%、濃厚飼料自給率は

前年度と同じ12%となっている。飼料自給率を反映した「食料自給率」を新たな指標とした。飼料が国産か輸入かにかかわらず、食料全体の供給に占める国内生産の割合をみても、カロリーベースでは食料自給率より9ポイ高い47%、生産額ベースでは3ポイ高い69%となった。食料自給率を高めるには、飼料自給率を向上させる必要がある。

・小麦中心の作付けの場合1人1日当たり1754ポイで前年度より27ポイ増加し、イモ類中心の作付けの場合は2537ポイで9ポイ減少した。結果、イモ類中心の作付けでは推定エネルギー必要量2168ポイを上回ったが、現実の食生活に近い米・小麦中心の作付けでは下回った。19年度の農地面積は439万7千ポイで、前年度より2万3千ポイ減少している。現状は、目標との隔たりが大きい。目標の隔たりが大きい。目標達成のため、各種施策で農業の生産基盤強化や国産農産物の消費拡大を着実に推進することが求められる。

生乳生産2年連続増の見通し

20年度都府県の飲用需給ひっ迫か

Jミルクは7月31日、20年度の生乳生産量と第3四半期末(4~12月)の牛乳乳製品の需給見通しを発表した。全国の生乳生産量は、前回見通し(5月)より0.5ポイ下方修正したものの、前年度比0.9%増の742万5千ト、2年連続の増産を見込んだ。

生乳生産量の見通しを地域別にみると、北海道は1.9%増の417万1千ト、都府県は0.5%減の325万5千ト。前回見通しに比べ、北海道の伸び率は1.3ポイ縮小するものの、都府県の伸び率は0.6%増

小するものの、都府県の減少幅が0.4ポイ縮小する見通し。都府県の第1四半期の生産量(実績)は前年同期比0.6%増と、前回見通しを0.8ポイ上回った。

2020年度の地域別生乳生産量(見通し) (千トン)

| 月 | 全国 | | 北海道 | | 都府県 | |
|-------|-------|--------|-------|--------|-------|--------|
| | 前年比 | 前年比 | 前年比 | 前年比 | 前年比 | 前年比 |
| 4月 | 634 | 101.8% | 345 | 103.1% | 289 | 100.3% |
| 5月 | 657 | 102.0% | 361 | 102.7% | 296 | 101.3% |
| 6月 | 623 | 100.7% | 350 | 101.2% | 274 | 100.2% |
| 7月 | 621 | 99.7% | 357 | 101.1% | 264 | 97.8% |
| 8月 | 602 | 101.1% | 348 | 102.1% | 255 | 99.9% |
| 9月 | 588 | 100.7% | 336 | 101.4% | 252 | 99.9% |
| 10月 | 609 | 101.2% | 344 | 101.9% | 265 | 100.4% |
| 11月 | 593 | 101.2% | 333 | 102.0% | 259 | 100.3% |
| 12月 | 624 | 101.3% | 351 | 102.3% | 273 | 99.9% |
| 1月 | 634 | 101.5% | 356 | 103.0% | 278 | 99.8% |
| 2月 | 583 | 97.7% | 326 | 99.3% | 257 | 95.7% |
| 3月 | 656 | 101.0% | 364 | 102.9% | 292 | 98.8% |
| 第1四半期 | 1,915 | 101.5% | 1,056 | 102.3% | 859 | 100.6% |
| 第2四半期 | 1,811 | 100.5% | 1,040 | 101.5% | 771 | 99.2% |
| 第3四半期 | 1,826 | 101.2% | 1,029 | 102.1% | 797 | 100.2% |
| 第4四半期 | 1,874 | 100.1% | 1,046 | 101.8% | 828 | 98.1% |
| 年度計 | 7,425 | 100.9% | 4,171 | 101.9% | 3,255 | 99.5% |

たことから、在庫が高水準となつている。脱脂粉乳の12月末時点の在庫量は、前年同期比13.2%増の7万8500トの見込み。政策で、飼料用等で活用する取り組みへの支援が行われていること

菊地文夫氏を新理事に選任
 西谷悟郎全国開拓振興協会会長は7月17日、協会に提案書(第1号議案)を提出し、第1号議案の件、第2号議案(理事1名選任の件)を提出した。7月31日までに全員の同意(賛成)が得られた。

今年度の講演会事業を中止
 全国開拓振興協会は、今年度の研修事業のうち、講演会事業を取り止める。10月中旬に開催(会場：福岡市)を予定していたが、新型コロナウイルスの全国的な感染拡大の状況を踏まえ、今年度は見送ることとした。

減される見通し。バターの12月末時点の在庫量は38.0%増の3万2600トと、年末の最需期も高水準の見通し。なお、3月以降消費が急増した家庭用バターは、引き続き堅調に推移すると見通し、同時点で

酪農・畜産経営継続を支援
 7月豪雨被害への対策
 農水省は7月30日、令和2年7月豪雨による農林水産関係被害への支援策を発表した。被災した農林漁業者が一日も早く経営再建できるように、総合的な対策を講じるとしている。

農水省は7月30日、令和2年7月豪雨による農林水産関係被害への支援策を発表した。被災した農林漁業者が一日も早く経営再建できるように、総合的な対策を講じるとしている。今回の豪雨で、河川の氾濫による浸水被害が広い地域で発生し、果樹、水稲、葉たばこへの土砂流入、農業用ハウスや機械、畜産物処理加工施設の損壊、林地荒廃などで広範囲にわたる被害が生じた。経営再建に向け、被災した農林漁業者を生活・生業支援パッケージにより支援する。パッケージに盛り込む対策は、農地等に堆積した土砂等の撤去に対する支援、再度災害防止の観点を踏まえた農地等の早期復旧、農業用ハウス・機械等の導入支援、営農再開に向けた支援など。強い農業・担い手づくり総合支援交付金(被災農業者支援型)を発動し、農業用ハウス・機械等の再建、修繕、再取得を支援する。事前着工も可能とする。また、被災した畜産農家の資金繰りを支援するため、肉用牛肥育経営安定交付金(牛マルキン)、肉豚経営安定交付金(豚マルキン)における生産者負担金の納付猶予などを実施する。

食料・農業 知っておきたい話 第88回

人にも動物にも環境にも優しい経営こそが持続できる

東京大学教授 鈴木宣弘氏

今回は、家畜の飼養衛生基準の改定における「放牧中止」案をめぐる騒動の顛末から、畜産・酪農における放牧の意義について考えてみたい。

今回は、家畜の飼養衛生基準の改定における「放牧中止」案をめぐる騒動の顛末から、畜産・酪農における放牧の意義について考えてみたい。

「放牧中止」案の驚きと、その削除の驚き

豚熱の防疫強化策として国が改定する「飼養衛生管理基準」案(2020年5月公表)に「放牧中止」が盛り込まれたことで、反対世論が噴出し、6月に提示された最終案から削除される顛末があった。

豚熱の防疫強化策として国が改定する「飼養衛生管理基準」案(2020年5月公表)に「放牧中止」が盛り込まれたことで、反対世論が噴出し、6月に提示された最終案から削除される顛末があった。



国民からの意見(パブリック・コメント)募集は「アライバイブ」で、それが当初案が変更されることは通常はまずないが、その意味では、異例の展開となった。

環境で健康的に育つことが病気を防ぐ基本中の基本である。工場型のメガ・ギガ畜産が増え、「3密」の舍飼がむしろ拡大していることこそが、感染症の原因であり、その意味からも、放牧禁止は、逆行しているように思われた。

環境で健康的に育つことが病気を防ぐ基本中の基本である。工場型のメガ・ギガ畜産が増え、「3密」の舍飼がむしろ拡大していることこそが、感染症の原因であり、その意味からも、放牧禁止は、逆行しているように思われた。

今回の議論は養豚だけではなく、以前に本コラムでも取り上げたが、牛が十分に運動できる放牧スペースがないのに頭数を増加すると、牛が快適でないだけでなく、ふん尿の過投入で、硝酸態窒素の多い牧草によって牛が酸欠症でバタリと倒れて死亡してしまう。

今回の議論は養豚だけではなく、以前に本コラムでも取り上げたが、牛が十分に運動できる放牧スペースがないのに頭数を増加すると、牛が快適でないだけでなく、ふん尿の過投入で、硝酸態窒素の多い牧草によって牛が酸欠症でバタリと倒れて死亡してしまう。

牛の健康がすべてにつながる

経営効率を優先することとは大事だが、牛を酷使し、環境に負荷を与え、回りまわって人の健康を脅かすならば、それで儲かって何になるか、という疑問は、それだけ高まる。前立腺ガンや乳ガンの確率が上がる。明らかに目先の業界の利益にはなっていない。結果、牛にとっても理想の環境は次の三つである。「外気と同じ品質の空気」、

経営効率を優先することとは大事だが、牛を酷使し、環境に負荷を与え、回りまわって人の健康を脅かすならば、それで儲かって何になるか、という疑問は、それだけ高まる。前立腺ガンや乳ガンの確率が上がる。明らかに目先の業界の利益にはなっていない。結果、牛にとっても理想の環境は次の三つである。「外気と同じ品質の空気」、

19/20年 米の需要実績22万ト超

来年6月末民間在庫20万ト超も

農水省は7月30日、都内食料・農業・農村政策審議会食糧部会を開き、「米穀の需給及び価格の安定に関する基本指針」を諮問。同省が示した主食用米の需給見通しは、19年産の相対取引価格(全銘柄平均)は、60円1万5千350円、米の在庫が200万トを超過、米価が下落する可能性が出てきた。

農水省は7月30日、都内食料・農業・農村政策審議会食糧部会を開き、「米穀の需給及び価格の安定に関する基本指針」を諮問。同省が示した主食用米の需給見通しは、19年産の相対取引価格(全銘柄平均)は、60円1万5千350円、米の在庫が200万トを超過、米価が下落する可能性が出てきた。

2020/21年の主食用米等の需給見通し (万トン)

| | | |
|-----------------|-------|---------|
| 20年6月末民間在庫量 | A | 201 |
| 20年産主食用米等生産量 | B | 709~717 |
| 20/21年主食用米等供給量計 | C=A+B | 910~918 |
| 20/21年主食用米等需要量 | D | 715 |
| 21年6月末民間在庫量 | E=C-D | 196~204 |

注1：20年産主食用米等生産量は、各産地の6月末現在の作付け意向を踏まえ、作物状況等によっては、上振れする可能性がある。
注2：20/21年主食用米等需要量は、過去のデータを用いてトレンドで算出した20/21年の1人当たり消費量(推計値)に、20年の人口(推計値)を乗じて算出した値であり、新型コロナウイルス感染症の状況等によっては、下振れする可能性がある。

近年、主食用米の需要は停滞しており、需要量は年間10万ト程度減少している。同省は今年3月時点で19/20年の需要量を前年比8万ト減の727万トと見通していた。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、外食な

近年、主食用米の需要は停滞しており、需要量は年間10万ト程度減少している。同省は今年3月時点で19/20年の需要量を前年比8万ト減の727万トと見通していた。新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、外食な

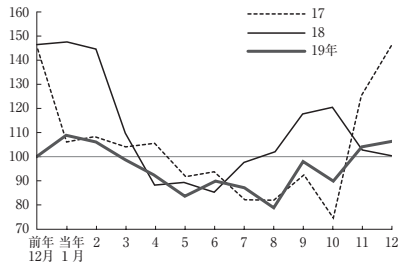
主食用米「微減」へ

20年産の作付け意向調査

農水省は7月17日、20年産の主食用米、戦略作物等の作付け意向調査結果を発表した。主食用米の作付面積を「前年並み傾向」としたのは、前回(4月末時点)に比べ、主産地の北海道など10道削減した。だが、主産地

農水省は7月17日、20年産の主食用米、戦略作物等の作付け意向調査結果を発表した。主食用米の作付面積を「前年並み傾向」としたのは、前回(4月末時点)に比べ、主産地の北海道など10道削減した。だが、主産地

野菜の月別価格指数の推移(直近3年間)



農水省がこのほど公表した「19年農産物価格指数」(15年基準)によると、農産物価格指数は、野菜などの価格低下により前年からの2.2%低下した。農業生産資材価格指数は1.2%上昇し、生産者への負担が重い状況が続いている。

全体の農産物価格指数は109.3となった。果実・米などは上昇したものの、野菜が出荷量の増加で下落したことが影響した。

類別で見ると、野菜は94.8で、前年から11.9%と大きく低下した(図)。暖冬で野菜の育ちが良く出荷量が増加したこと、低温などで生育が遅れて1~2月に価格が高騰した前年と比べ価格が低下したため。ネギ、キャベツ、ハクサイなどで下がっている。

果実は116.4で、前年から1.7%上昇した。台風被害で出荷が減り、価格が上がったこと、天候不順で生育が遅れブドウが値上がりし

08~18年調査 レタスの購入量が増加傾向 キャベツは安定して推移

キャベツは安定して推移

農畜産業振興機構はこのほど、18年の「指定野菜の生産・流通・消費動向」の調査結果を公表した。それによると、キャベツで前年より国内生産量は増え、08~18年で一人当たり年間購入額が増加している。また、国内供給量(国内生産量+輸入量)に対する国内割合はレタスなどが横ばい傾向で推移している。

【キャベツ】

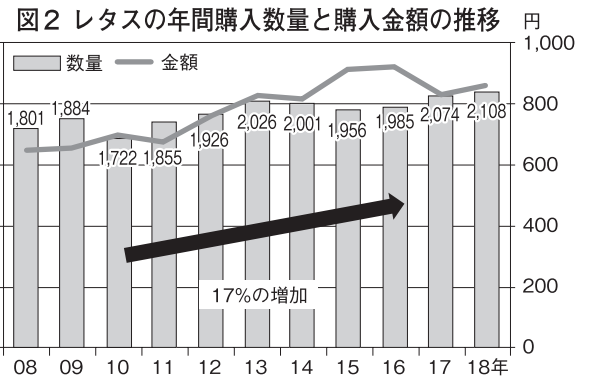
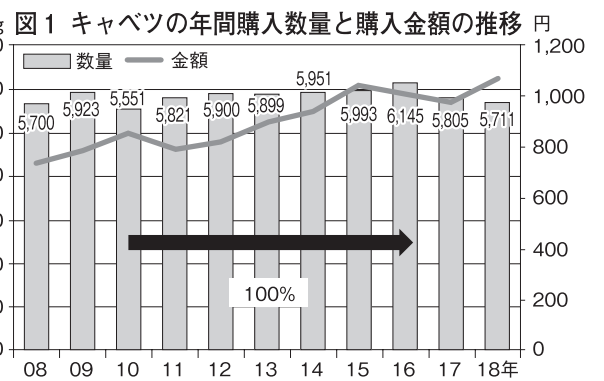
国内供給量は約156万ト(前年比6.1%増)。直近10年間で約17万ト増と、増加傾向で推移。供給量に占める国内割合は約14.7万ト(前年比2.8%増)だった。一方、輸入量は12年から横ばい傾向だったが、天候不順で減少しているが、購入金額は直近10年で増加傾向。家庭で手軽に利用できる鍋つゆの普及が一因とみられている。

【ハクサイ】

国内供給量は約90.6万ト(2.5%増)。国内産割合はほぼ100%だが、前年から輸入量が約1.6万トと5倍超に増加した。

【ホウレンソウ】

国内供給量は約28.0万ト(2.6%増)。国内産割合は前年と同じだが、輸入量が15.6%増と、08年から17%増えた。販売価格に関係なく増加傾向(図2)。加熱調理やサラダでの利用が進んでいるためとみられる。購入金額は直近10年では増加傾向だが、15~16年をピークに17~18年は低下している。



農畜産業振興機構(農産物価格指数/農業生産資材価格指数)100で計算)は107.3で、15年から上昇が続いているが、低下に転じた。

※農業取引条件指数とは、生産者の収益環境の変化を示す。上昇は経営環境の改善を意味する

農畜産業振興機構はこのほど公表した「19年産切り花類の出荷1%減」によると、バラは6%下げた。切り花類の出荷量は34億8200万本で、前年から5200万本(1.5%)減少した(図)。作付面積は1万3800畝(3%)減少した。

○カーネーションは出荷量が2億2700万本(5%)減った。作付面積は27畝で、19畝(7%)減少していることがうかがえる。県別では、長野21%、

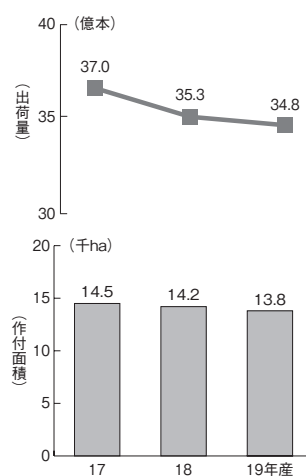
愛知20%、北海道・兵庫が9%などで多く、上位4県で全体の約6割を占める。

○バラは出荷量が2億2120万本で、1480万本(6%)減少した。作付面積は302畝で、23畝(7%)減少した。県別では、愛知18%、静岡9%、山形・福岡7%の順が高い。

○リンドウは出荷量が8520万本で、370万本(4%)減少。作付面積は422畝で、10畝(2%)減少した。県別では、岩手57%、秋田15%、山形8%の順で多く、上位3県で全体の8割を占める。

○ユリは出荷量が1億

切り花類の面積・出荷量(全国)



2400万本で、630万本(5%)減少した。作付面積は693畝で、20畝(3%)減少。県別では、埼玉20%、高知11%、新潟9%の順で、上位3県で約4割を占める。

○切り葉、切り枝、アールストロメリアはそれぞれ出荷量が870万本(8%)、280万本(1%)、280万本(5%)増加している。

鉢ものの類の出荷量は2億500万鉢で、460万鉢(2%)減少。収穫面積は1549畝で、56畝(3%)減少した。県別では、愛知26%、埼玉10%、岐阜・静岡7%の順で高く、上位4県で約5割を占める。

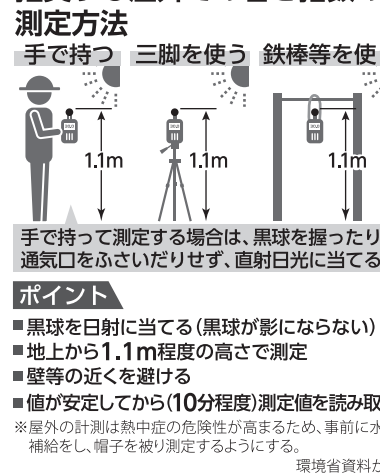
農作業中の熱中症に注意

「新しい生活様式」での予防行動

暑さがピークとなり、農水省は農作業中の熱中症の注意喚起を行っている。今年も新型コロナウイルスの対策と熱中症対策の兼ね合いが重要となるため、可能な時には31度以上の日に注意

暑さがピークとなり、農水省は農作業中の熱中症の注意喚起を行っている。今年も新型コロナウイルスの対策と熱中症対策の兼ね合いが重要となるため、可能な時には31度以上の日に注意

推奨する屋外での暑さ指数の測定方法



31度を超える場合は「危険」と基準が決まっている。涼しい地域であっても、気温をこまめにチェックし十分に注意する。新しい生活様式を意識し、人と人の距離を十分保つ、マスクを着用する、手洗い、3密(密集、密接、密閉)を避ける、などの新しい生活様式を取り入れつつ、マスクの着用は熱中症のリスクを上げるため、適宜外すことが重要となる。

屋外では「暑さ指数計(熱中症予防のため、湿度や日射などを測るもの)」を使う(図)など工夫し、気温が高い時は無理をせず、水分・塩分補給などに努める。

補強や各部点検など事前確認を

ハウス栽培の台風対策

全国で大規模な災害が頻発している。特に、台風や大雨による被害は深刻なものであり、少しでも被害を軽減するため対策の必要性が高まっている。ハウス栽培における台風対策を中心に改めて確認したい。

事前準備

平時に、自身の所有するハウスが耐えられる風速を調べておく。パイプハウスは補強を行うことで、耐風性を高めることができる。特に、過去に被害を受けた場合は、タイバーやX型斜材の設置による補強(下図)を行っておく。パイプ径が太いほど耐風性は高くなる。

ハウスを新設する際は、周囲の地形や風向き、過去の気象データなどを踏

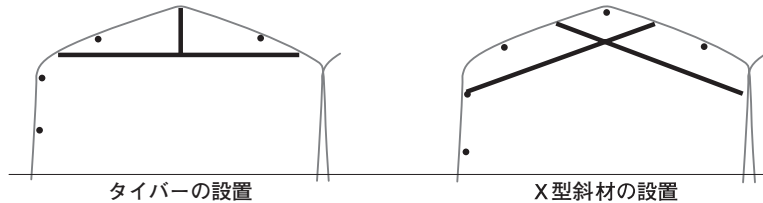
まえた上で、耐候性ハウスの設置も検討する。

各部の点検も徹底する。見るべき箇所は、谷樋や柱の腐食やサビ、留め金具のゆるみ、被覆のゆるみなど。また、作付けしていない場合は、被覆資材を外しておく。被覆資材を張り替える時は、併せてパイプの不調も点検すると効率的。

風が吹き込むと、大きな被害を生じる。スプリングやパッカーでサイドビニールを留めてばたつきを防ぐ。

周辺では、雨水の滞留やハウス内への水の侵入を防ぐために地面を整備する。排水路がゴミでふさがれていないか、燃料タンクやガスボンベがしっかりと固定されているかも確認してお

図 農業用ハウスの被害防止対策



寄せ付けない環境づくり大切

秋のイノシシ・シカ被害に警戒

鳥獣被害は営農意欲の減退、耕作放棄・離農者の増加、車両との衝突事故など被害額として数字に表れる以上に農村に影響を及ぼしている。

特に秋は、イノシシやシカの繁殖時期であり、エサを狙って農村に出没することが多くなる。餌付けしてしまうと、頭数が増えて翌年以降の被害が大きくなる。これら野生動物の被害防止に重要な点をまとめた。

動物ごとの特徴

イノシシは農作物の食害だけでなく、耕地を掘り起こす、土手・水路をくずすなど土地への被害を及ぼす。臆病で警戒心が強く、パニックになった時には人間に向かってくるため、注意

が必要である。

シカは、特定の縄張りを持たない。2m程度の柵であれば飛び越せるが、通常は柵の下から潜り込む。

寄せ付けない環境づくり

農村へ定着しないように環境づくりをする必要がある。農地に接した草むらやヤブを刈り払い、野生動物の隠れ場所をなくす。雑草が生い茂った耕作放棄地も侵入しやすい。農地との間に、見通しの良い緩衝地帯を設けることで近付きにくくなる。

廃棄した野菜や収穫しない果実は、そのまま放置しておかない。コンポスト容器での堆肥化や農地に埋めるなどして処理する。カキヤクリなどの放任

(3%)減少して1900haとなった。10a当たり収量は、天候不順で大きく減少した18年産より改善し、50kg(4%)上回る1330kgとなった。

収穫量は300t(1%)増の2万5300t、出荷量は700t(3%)増の2万2500tとなっている。都道府県別の収穫量割合は、愛媛が24%、福岡が21%、和歌山が12%となっており、この3県で全国の約6割を占めている。

19年産キウイフルーツ

収穫量1%増加

農水省はこのほど、「19年産キウイフルーツの結果樹面積、収穫量及び出荷量」を公表した。収穫量は、大幅な減少となった前年産に比べ、1%増加した。

結果樹面積は、18年産に比べ50ha

く。

台風接近時には、農水省が作成した「チェックシート」(右表)を活用し、対策で不十分な箇所がないか改めて確認する。台風通過中に無理な作業は行わないこと。

事後対応

浸水などにあった場合は、排水ポンプによるくみ上げなどで速やかな排水に努める。

台風通過後にハウス各部を点検し、必要に応じて補修す

る。構造体のボルト、筋かいを締め直す。筋かいは端からきつく締めるのではなく、ハウス全体が均等に緊張するように締めつける。

支柱、防虫ネットなどの資材や栽培施設は異常がないかできる限り早期に点検・修復を行い、環境制御装置や電照・補光関連設備(電球、タイマー等)については、速やかに作動状況の点検を行う。

表 台風前のチェックリスト

| | | |
|------|---|---|
| 情報収集 | ① | 最新の気象情報、警報、注意報を常にチェックしていますか。 |
| | ② | ハウス周辺から飛来が予想されるものを片付けましたか。 |
| | ③ | 燃料タンクやガスボンベ等はしっかりと固定されていますか。 |
| | ④ | 施設周辺の排水溝やハウスの谷樋・縦樋等のゴミは取り除きましたか。 |
| 周辺整備 | ⑤ | タンクにかん水用水を貯水しましたか。 |
| | ⑥ | 自動換気(天窗、側窓)・遮光カーテンの手動開閉の操作器具や足場は準備できていますか。 |
| | ⑦ | (発電機を持っている場合) 非常用発電機を養液栽培装置、環境制御装置に接続しましたか。 |
| 停電対策 | ⑧ | 被覆資材のたるみや破れはありませんか。 |
| | ⑨ | 換気部(サイド部、谷部)、被覆材の隙間等の風の吹き込み口となる箇所はありませんか。 |
| | ⑩ | ハウスバンド、被覆材の留め金具に緩みはありませんか。 |
| | ⑪ | ブレースや筋かいの留め金具に緩みはありませんか。 |
| | ⑫ | 基礎部、接続部分、谷樋・柱に腐食・サビはありませんか。 |
| | ⑬ | 準備していた斜材を設置するなど応急的な補強はしましたか。 |
| | ⑭ | ハウスの出入り口の補強(かんぬき等)や戸締めりはしましたか。 |
| | ⑮ | (換気扇のあるハウス) 換気扇をまわして排気し、ハウス内を減圧していますか。 |

図・表ともに農水省の資料より

通過後は、強い日射しによりハウス内温度が急上昇する。高温障害が生じやすいので、フィルム巻き上げなど換気操作を行う。

停電が発生した場合は、速やかに手動または非常電源の作動による換気などで高温防止対策を行う。作物のしおれが予想される時も、速やかに手動または非常電源を利用してかん水を行う。

果樹があれば除去も検討する。

侵入防止柵は、効果が高まるように設置する。ワイヤーメッシュ柵は、上部を少し外側に折り返すと侵入されにくくなる。電気柵は、電線に雑草などが触れて漏電しないよう、日頃からメンテナンスを欠かさないことが大切。

また、人への感電を防ぐため注意表示を設けるなど、法令を守って使用しなければならない。トタン板は、板と板の間や接地面をしっかりと固定する。

これらの対策は、農家ごとに個別で行うよりも、地域全体で連携して実施することが重要となる。

農水省、土壌くん蒸剤の適正使用求める 被覆徹底で周辺住民への被害防止

農水省は、土壌くん蒸剤として使われている「クロルピクリン剤」の適正使用について注意を呼びかけている。

同省は昨年、使用実態や現場での指導方法について全国調査を行ったところ、ほとんどの都道府県において、主に根菜類、花き類・観葉植物で使用されていた。また、9割以上の産地で使用時の完全被覆が実施されていたが、一部では、「近くに住宅がない」「栽培面積が広い」「コストがかかる」などの理由で、被覆が実施されていないケースもあった。

同剤は刺激性があることから、農業者自身だけでなく周辺住民にも被害が生じることがないように、生産現場での適正な取り扱いを徹底することが必要。改めて使用上の注意点を確認したい。

同剤を使用する際は、近くに住宅地がない場合でも被覆をしなければならない。自身だけでなく、周辺で被覆せずに使用する農業者がいたら注意する。農業者自身が危険意識を持つことが重要である。特に周辺に住宅地がある場合、被害が生じないよう以下の取り組みを行う。

①周辺住民への説明や事前の周知を徹底する。使用目的や日時も知らせておく。②被覆をしっかりと行う。これまで被覆をしていた場合も、その方法が正しいかなど改めて基本を徹底する。③被害防止のため、追加で対策を行う。「風向きや気温を考慮した薬剤処理の徹底」「厚さ0.03mm以上や薬剤を通しにくい資材の活用」「処理と同時に被覆が行える機材の活用」などがさらなるリスク低減に効果があると期待できる。

北海道立総合研究機構酪農試験場

分娩後体重上限650kg、一乳期高栄養で
初産次乳量高める飼養管理法

初産牛は、乳量が低くなりがちである。初産次の乳量向上のため、疾病や事故などが起きない水準での効率的な飼養管理法の確立が求められている。

(地独) 北海道立総合研究機構酪農試験場は、初産牛の乳量高めるとともに、栄養状態に起因する疾病や事故を低減するための適正な分娩後体重及び泌乳期の飼料養分濃度を明らかにした。

1 初産分娩後の目標体重

初産分娩後体重と初産次の分娩状況や乳生産性の関係を検討し、初産分娩後の適正な体重を設定した。これには、11～15年の全道牛群検定成績(初産分

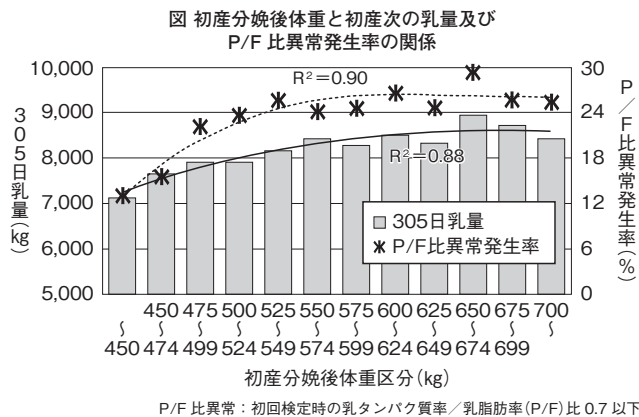
娩月齢24ヵ月以下、分娩後30日以内に体重記録のある初産牛約8万頭)と合わせて同試験場産の初産牛172頭を用いた。

その結果、初産分娩月齢が24ヵ月以下の場合、初産分娩後体重が大きいほど初産次の305日乳量は高まるものの、体重650kg以上では乳量の増加程度は小さくなった(図)。

また、分娩後体重が大きくなると乳タンパク質率/乳脂肪率(P/F)比の異常発生率が高まるが、体重550kg以上ではほぼ一定値に安定した。分娩後体重650kg以上では、難産・死産率が高く、初産分娩前の過肥{BCS(ボディコン

ディションスコア) 3.75以上}、初産分娩前後の乾物摂取量低下がみられた。

以上により、初産分娩後体重の増加は乳量向上に有効だと示されたが、その上限は650kgが目安と考えられる。

表 飼料の養分濃度¹及び初産分娩後体重が初産次の305日乳生産に及ぼす影響

| 処理区 体重区分 | 対照区 | | | 高栄養区 | | |
|-------------------------|--------------------|---------------------|---------------------|---------------------|--------------------|--------------------|
| | 549kg以下 | 550～599kg | 600～649kg | 549kg以下 | 550～599kg | 600～649kg |
| 実乳量 (kg) | 6,957 ^b | 7,127 ^b | 7,752 ^{ab} | 7,777 ^a | 7,796 ^a | 8,413 ^a |
| 4%乳脂補正乳量 (kg) | 7,169 ^c | 7,416 ^{bc} | 8,098 ^b | 7,942 ^{ab} | 8,245 ^a | 8,541 ^a |
| 乳脂肪率 (%) | 4.22 | 4.28 | 4.32 | 4.15 | 4.39 | 4.11 |
| 乳タンパク質率 (%) | 3.38 | 3.36 | 3.39 | 3.34 | 3.39 | 3.29 |
| 乾物摂取量 (kg/日) | 分娩後0～149日 | 15.3 ^b | 16.0 ^b | 17.5 ^a | 15.4 ^b | 15.7 ^b |
| | 分娩後150～305日 | 15.8 ^c | 17.0 ^{bc} | 18.5 ^a | 18.5 ^{ab} | 18.9 ^a |
| TDN充足率 ² (%) | 分娩後0～149日 | 82 | 82 | 83 | 81 | 81 |
| | 分娩後150～305日 | 93 ^b | 96 ^b | 99 ^{ab} | 103 ^{ab} | 105 ^a |
| BCS | 分娩7～14日前 | 3.38 ^b | 3.46 ^{ab} | 3.63 ^a | 3.36 ^b | 3.48 ^{ab} |
| | 分娩後305日 | 3.04 | 3.05 | 3.17 | 3.19 | 3.25 |
| 空胎日数 (日) | 98 | 89 | 98 | 106 | 95 | 91 |
| 分娩後150日以内受胎率 (%) | 78(14/18) | 79(23/29) | 78(14/18) | 64(14/22) | 87(20/23) | 91(10/11) |

異符号間に有意差あり (abc: p<0.05)、TDN: 可消化養分総量、BCS: ボディコンディションスコア、受胎率の () 内は受胎頭数/供試頭数
¹飼料の養分濃度(乾物中): 【対照区】分娩～分娩後149日目: TDN74%、CP16%、分娩後150日目～乾乳: TDN69%、CP14%、【高栄養区】分娩～乾乳: TDN74%、CP16%

²日本飼養標準・乳牛(2017年版)に基づいて算出

図・表ともに(地独)北海道立総合研究機構酪農試験場ホームページより

2 初産泌乳期の栄養水準

同試験場の初産牛111頭を供試し、初産分娩後体重に応じた適正な飼料養分濃度を検討。対照区{65頭、初産分娩～分娩後149日: TDN(可消化養分総量)74%、CP(粗タンパク質)16%、分娩後150日～乾乳: TDN69%、CP14%}と、高栄養区(56頭、初産分娩～乾乳: TDN74%、CP16%)とした。各区をさらに初産分娩後体重ごとに分けて調査を行った。

初産分娩後体重650kg未満の場合、高栄養区は、対照区に比べ4%乳脂補正乳量が平均680kg高かった。また、泌乳後期のTDN充足率及び乾乳前のBCSは適正範囲だった(表)。このことから、初産牛では初産泌乳期間中に飼料の養分濃度を変えない「一乳期高栄養飼養」を行うことで、乳量が向上するとされた。

初産分娩後体重549kg以下は、高栄養区で泌乳後期の体重増加量が最も大きくなった。549kg以下だと、初産泌乳期の成長に要する養分量が大きいと考えられ、体重は550kg以上が望ましいとされたが、体重が小さい場合は「一乳期高栄養飼養」によって増体の向上も期待できる。

さらに、現地酪農場(十勝管内1戸、根室管内2戸)にて、「一乳期高栄養飼養」の効果を検証。その結果、初産分娩後体重650kg未満を保つことにより、分娩後体重が大きいほど乳量が高いこと、分娩後のエネルギーバランスの悪化や初産乾乳前の過肥を招くことなく高い初産次乳量を得られることが確認された。

同試験場は、この管理法の利用上の留意点として、初産分娩前のBCSを適切に管理することを挙げている。

自作機器でトラクター走行アシスト

花平ホルスタイン改良同志会が研修会

岩手県滝沢市の花平ホルスタイン改良同志会(鈴木稔会長)は7月7日、岩手花平農協内で「GNSSガイダンス研修会」を開催。生産者ら10数名が参加した。講師に農研機構東北農業研究センターの長坂善禎氏を招き、スマ

ート農業技術への理解を深めた。紹介されたのは、GNSS(人工衛星を用いた誤差の小さい位置特定方法)を利用し、カーナビのようにトラクターの経路を画面上に表示するというもの。牧草地での施肥や牧草の反転

畜産「継承うまくいかず」35%

経営理念合わないなどで

日本全業工業(株)の運営するWEBマガジン「どこいしょニッポン」は、事業継承に関する実態調査の結果を公表した。インターネットで18歳以上65歳以下の畜産農家を対象に行ったもので、180名から回答があった。親子だからこそ存在する確執や感情が障壁になっていることがうかがえた。

事業継承について、「スムーズにいった(スムーズにいきそう)」と答えた人は65%で、残りの35%はスムーズにいけないと回答している。

スムーズにいけない理由として最も多く挙げられたのは、「経営理念が合わない」(65票)だった。次いで、「い

つまでも子供扱いする」(49票)、「完全に経営権を渡さない」(48票)の順となった。

継承元の意見では、「搾乳の仕方、金銭の感覚、継承者の責任感のなさに不安を感じる」(酪農)などがあった。一方、スムーズにいった継承元からは、「家族経営協定を定めたり、第三者の目を入れて話を進めることも大事」(酪農)というアドバイスもあった。

継承者からは、「受精卵移植を導入しようとした時に否定され、世代の温度差を感じた」(酪農・肉牛)、「人手の重要性やICT(情報通信技術)活用の利点を中々理解してくれない」(酪農)などが挙げられ、技術導入や経営方針で対立することが多い傾向にあった。

など、すでに作業した場所を目視できるため、作業の効率化につながる。さらに、経験の浅い運転者でも、熟練者に近い作業精度が得られる。

研修会では、すでに組み立てられた市販品を用いるのではなく、GNSS受信機やタブレットなどの部品を用意して機器を自作。コストを抑え、比較的導入しやすくした。長坂氏は、「スマート農業技術は様々なものがあり、使えそうなものを判断するのは難しいと思う。このような研修を機械装備導入の判断材料にして欲しい」と語った。参加者は、説明を受けながら自分で



写真提供: 全開連岩手事業所

部品を組み立てて、ガイダンスソフトウェアを設定後、各自持ち込んだトラクターに取り付けた(写真)。実際に駐車場でシステムを使いながら走行し、感触を確認した。

換気・送風で快適な環境を

養豚の暑熱対策

夏の暑さが最も厳しい時期を迎えている。豚は、汗をかいて体温を調節することができず、体が厚い皮下脂肪に覆われていることもあり、特に暑さに弱い。豚舎環境と飼養管理の両方から暑熱対策を講じる必要がある。

豚舎では、グリーンカーテンやひさしで光を遮る他、屋根への散水や断熱塗料の塗布などが有効である。特に種豚は熱中症にかかりやすいため、涼しい環境を整えることが重要。換気や送風を念頭に置き、通風を妨げるような

障害物は取り除いておく。空気が一方方向に流れるような窓の開け方とする。ただし、哺乳豚・離乳豚には直接風を当てないようにする。

冷水の散水や噴霧は熱放散に有効だが、湿度が上昇し過ぎないように日中のみ実施する。繁殖豚の首元から首筋にかけて、頭上から水滴を落とす「ドリップ滴下(ドリップクーリング)」は体感温度低下に効果がある。水を入れたペットボトルを凍らせて頭上に設置する方法が簡易に実施できる。

飼養管理面では、新鮮な水の供給、密飼いを避ける、涼しい時間帯の飼料給与、飼料の品質劣化など基本的な事項を徹底する。

群馬県畜産試験場

ゲノミック評価高い個体が成績良好

黒毛和種 肥育効率化に利用可能

肥育牛は両親の能力が枝肉重量などの肉質成績にとって重要だが、能力を判断する指標の1つである育種価(BLUP法)は判明するまでに時間がかかり、また、子牛の期待育種価は両親の育種価成績の平均値から推測するため、予測と結果が一致しないこともある。

一方、ゲノミック評価は各個体のDNAを検査し、そのわずかな違いを分析し、遺伝的能力を推定しているため、生後早い段階で能力の推定が可能になるなど育種価の短所を補っているものの、評価がどのように飼養成績に活かせるのかはまだ不明な点が多い。

そこで、群馬県畜産試験場は、(一社)家畜改良事業団の協力のもと、子牛の育成段階のゲノミック評価の結果がどのように肥育成績に活かせるのかを検証する試験を行った。その結果、枝肉重量のゲノミック評価値が高い牛は肥育期間を短縮できることを明らかにした。

【方法】

2017年5月に育成段階でゲノミック評価{(一社)家畜改良事業団が実施}を行った9ヵ月齢の黒毛和種去勢牛8頭を供試した。なお、同一種雄牛で結果を分析するため、試験当時県内の市場で取引頭数の最も多かった「美津照重」の産子を用いた。枝肉重量のゲノミック評価値が「H」及び「A」と高かった「高評価区」に3頭(Hは基準集団における順位が上位1/10以上のもの、Aは上位1/4以上、1/10未満のものをいう)、「C」及び「D」と低かった「低評価区」に5頭を振り分けて実施した。

両区とも同じ市販の飼料を給与し、肥育前期(9~12ヵ月齢)の濃厚飼料は4~5.5kg/日、中期(13~14ヵ月齢)は6~8kg/日の定量給与とした。中期は前期と後期の飼料を混ぜ、徐々に後期飼料を増やした。15ヵ月齢以降は全て後期飼料とし、17ヵ月齢以降は飽食とした。粗飼料は9~12ヵ月齢は輸入チモシー乾草を与え、13ヵ月齢から

稲わらの割合を増やしていき、14ヵ月齢からは稲わらのみを給与した。それぞれ4cmほどにカットし、全期間飽食とした。試験期間は2017年6月~2019年2月とし、全頭28ヵ月齢でと畜した。

【結果】

枝肉重量と脂肪交雑で高評価区が有意に上回った(表)ほか、飼料摂取量や日増体量も高かった。また、試験牛の体重から歩留まりを63%で試算した高評価区の枝肉重量は24ヵ月齢時点で512kgとなり、日格協の当時(2018年1~12月)の全国における平均枝肉重量

を8kg上回った。ゲノミック評価値が高い個体では肥育期間を短縮しても十分な重量が確保できることが確認できた。

また、枝肉格付成績と育成時のゲノミック評価値には枝肉重量(図)、BMS No、胸最長筋面積、ばらの厚さ、皮下脂肪の厚さで相関関係がみられた。

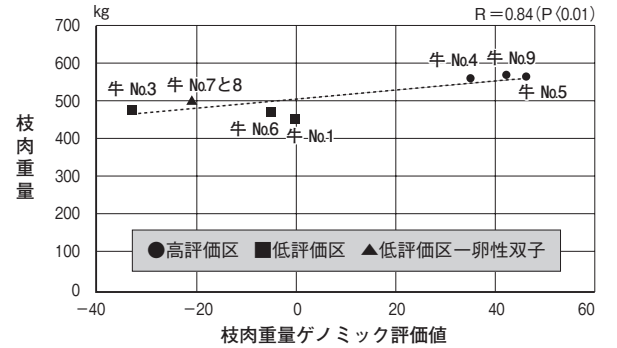
枝肉重量のゲノミック評価値が高い

表 枝肉格付成績

Table with 3 columns: 項目, 高評価区, 低評価区. Rows include 枝肉重量(kg), 胸最長筋面積(cm²), ばらの厚さ(cm), 皮下脂肪の厚さ(cm), 歩留基準値, 脂肪交雑(BMS No), 肉色(BCS No), and 格付.

※異符号間に有意差あり A, B: P<0.01

図 ゲノミック評価値と枝肉重量



表・図ともに群馬県畜産試験場の資料から

個体は発育が良いため、群編成などに応用することにより、肥育期間の短縮や効率的な出荷管理に役立てることができる。

なお、同試験場は留意点として、ゲノミック評価は解析ごとに数値が変動するので、同じ時期に評価を行ったもので比較することを挙げている。

【出典：肉用牛研究会報, No.108(2020)】

牛への声かけ・安全靴の使用を 作業中の事故に要注意

(独)家畜改良センターはこのほど、「畜産関係労働災害事例集」を公表した。作業中にひそむ様々な危険や事故を18の類型に分けて分析し、原因と対策をまとめたもの。その中から、肉用牛の生産現場で発生した事故の原因・対策を紹介する。

同センターは安全訓を作り、①保護具を面倒と思わない②確認は人任せにしない③危ないと気づいたらすぐ直す④共同作業は声をかけ合うなどを常に念頭に置き、作業に取り組むことを推奨している。

▼保護具の種類と装着

衛生用や防塵用などのマスク、切り

傷ややけどなどの防止のための保護手袋、重作業の対策や踏抜き防止のための安全靴などの着用を徹底することが重要。作業内容により装着しなければならない保護具が法令等で定められている。決まっている作業以外でも、危険がある時には保護具を装備する。

▼牛の行動に注意・安全装備徹底を

ケース1は、肥育牛の出荷作業で、920kgの肥育牛に繋いでいたロープを引き、誘導柵に移動させようとしたところ、牛が急に突進し、ロープと柵の鉄柱の間に右手親指が挟まれて骨折などのケガを負い、10日間の休業が必要となった事故。

または汚染された畜舎や倉庫から出る人・物だけではなく、どちらも、出入りする人・物の消毒が義務化②疾病発生時の県や地域への協力の強制力が強化③伝染病発生時、移動制限や交通制限が更に強化④研修などを通して家畜伝染病の正しい知識を積極的に習得することなどを求めている。

伝染力の強い疾病のまん延を防ぐため、より高い危機意識を持って対策に取り組むことが重要となる。

原因は、突然牛が突進した際に、止めようとつさにロープを強く握ったことだった。対策として、出荷作業など牛にとって非日常的な状況では、人に慣れている牛でも興奮して予期せぬ行動を取ることがあるので、十分注意して作業すること。牛を引くロープを扱う時には、いつ暴れだしても大丈夫なよう、いつでも手から離せる状態にしておく。

ケース2は、5頭の成牛をスタンションに保定し後方から直腸検温しようとした際、不意に牛が右後ろ脚を蹴り上げ、右ひざの内側を2回蹴られた事故。

原因は、気性が荒い牛にも関わらず、当日落ちていたため、油断して声かけせずに作業を行ったこと。対策には、検温や注射などの牛が嫌がる作業では、声かけや牛に触るなどしながら、作業をする牛だけでなく、隣や近くにいる牛にも注意を払うことが重要となる(写真)。

▼ローダー作業時は重心の高さに注意

ケース3は、乾草ローラーをほぐす時、スキッドステアローダーで持ち上げたローラーがグラップルフォークから外れてフロントガラスに当たり、割れたガラスの破片が運転者の顔と体に当たって眼などに外傷を負った事故。

原因は、牧草ローラーがしっかり掴めていなかったこと・アームを上昇させ

牛にいきなり触り事故になった事例



写真提供: (独)家畜改良センター

て重心が高い状態で重いローラーを揺すったことだった。対策は、グラップルフォークに限らず、アームを高く上げて重いものを扱う時には、ダンプやすくい動作など急な操作を行わないこと。また、ローラーのほぐし作業は地上に置いてアームを低い位置で操作することが有効となる。

この他、「ケガをしやすい構造の子牛の哺乳バケツを使用し回収時にケガをした事故」、「保定・手袋の装備が不十分で、削蹄中の牛の急な動きで削蹄器具で手を痛めた事故」、「スタンションの牛の首が入っているところに手を入れケガをした事故」、「鉋塩の運搬作業で段ボールの底面を持たず、安全靴を履いていなかったため底が抜けて足にケガをした」などが発生している。

いずれの事故も、牛への声かけ、動きに注意を払った作業、保護具の使用などで防げるものであるため、よく注意し安全対策を講じることが重要となる。

消毒や疾病発生時の協力義務化 改正家畜伝染病予防法が施行

改正家畜伝染病予防法が7月1日から施行された。生産者の取り組みでは、以前よりも義務がより強化されたものがあるため紹介する。特定家畜伝染病(肉用牛では、口蹄疫・牛疫・牛肺疫)の侵入・まん延を防止するための大きな変更点としては、生産者をはじめ畜産関係者の義務がより強化された。

具体的には、①衛生管理区域に入る

畜産物需給見通し

牛枝肉

コロナで例年の行楽需要見込めず、もちあいか

今年の梅雨は長期化し、全国的に記録的な大雨に見舞われた。7月は外食など業務用需要の回復ペースが鈍かったものの、和牛及び交雑種の相場が上昇した。

【乳去勢】7月の東京市場乳牛去勢B2の税込み平均枝肉単価(速報値、以下同じ)は923円(前年同月比91%)となり、前月に比べ24円下げた。

農畜産業振興機構の需給予測によると、8月の乳用種の全国出荷頭数は2万6100頭(95%)と減少を見込んでいる。

【F₁去勢】7月の東京市場の交雑種(F₁)去勢税込み平均枝肉単価は、B3が1329円(前年同月比81%)、B2は1153円(76%)となった。前月に比べそれぞれ147円、116円上げた。出荷頭数の減少もあり、前月の低迷から上向き、じり高傾向となった。

同機構は8月の交雑種の全国出荷頭数を1万7100頭(97%)と、減少基調が続くと予測している。

【和去勢】7月の東京市場の和牛去勢税込み平均枝肉単価は、A4が2038円(前年同月比85%)、A3は1832円(84%)となった。前月に比べそれぞれ178円、184円上げた。A5は149円高の2405円(88%)だった。

同機構は8月の和牛の全国出荷頭数は3万4000頭(105%)と増加を見込ん

でいる。全体の出荷頭数は7万8700頭(100%)と前年並みを予測している。

一方、8月の輸入量は総量で4万9200t(92%)と予測している。内訳は冷蔵品が2万3100t(89%)、冷凍品が2万6100t(95%)。新型コロナウイルス感染拡大に伴い外食需要が減少し、国内在庫が高水準にあることに加え、米国や豪州の生産量の減少による現地価格の高騰等から、冷蔵品、冷凍品ともに前年同月を下回ると見込んでいる。

例年であれば、夏休みなどで行楽需要が見込めるが、今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、需要の大幅な増加は考えにくい。

大都市圏を中心に同ウイルスの感染が再拡大している。当面、イベントや会食の自粛が求められる。外食需要の回復が遠のくことが懸念される。

外食控えで、肉食向けの引き合いが強まるとみられる。家庭消費の盛り上がりにより期待したい。相場は、総じてもちあいの展開が予想される。

向こう1ヵ月の東京市場の税込み平均枝肉単価は、乳牛去勢B2が900~950円、F₁去勢B3が1250~1350円、B2は1100~1200円、和牛去勢A4が1950~2050円、A3は1750~1850円での相場展開か。

家庭消費増を期待

7月の子牛取引状況

(頭、kg、円)

| ブロック | 品種 | 頭数 | | 重量 | | 1頭当たり金額 | | 円/kg | |
|-------|------------------|--------|--------|-----|-----|---------|---------|-------|-------|
| | | 当月 | 前月 | 当月 | 前月 | 当月 | 前月 | 当月 | 前月 |
| 北海道 | 乳去 | 569 | 631 | 291 | 292 | 231,846 | 238,309 | 797 | 816 |
| | F ₁ 去 | 1,148 | 1,214 | 318 | 318 | 387,567 | 383,790 | 1,219 | 1,207 |
| | 和去 | 1,852 | 1,418 | 313 | 314 | 660,211 | 644,876 | 2,109 | 2,054 |
| 東北 | 乳去 | 9 | 16 | 199 | 193 | 87,633 | 73,906 | 440 | 383 |
| | F ₁ 去 | 10 | - | 320 | - | 426,030 | - | 1,331 | - |
| | 和去 | 1,761 | 1,837 | 308 | 308 | 617,372 | 597,638 | 2,007 | 1,942 |
| 関東 | 乳去 | 72 | 89 | 283 | 284 | 282,134 | 273,084 | 997 | 962 |
| | F ₁ 去 | 83 | 87 | 311 | 303 | 397,749 | 383,545 | 1,277 | 1,265 |
| | 和去 | 771 | 884 | 263 | 273 | 612,349 | 624,202 | 2,330 | 2,287 |
| 北陸 | 乳去 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| | F ₁ 去 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| | 和去 | 119 | 56 | 277 | 292 | 722,977 | 615,292 | 2,610 | 2,107 |
| 東海 | 乳去 | 10 | 7 | 289 | 293 | 246,179 | 252,057 | 853 | 860 |
| | F ₁ 去 | 25 | 50 | 289 | 288 | 368,676 | 343,859 | 1,276 | 1,192 |
| | 和去 | 439 | 246 | 263 | 253 | 707,981 | 615,159 | 2,690 | 2,432 |
| 近畿 | 乳去 | 1 | - | 129 | - | 200,200 | - | 1,552 | - |
| | F ₁ 去 | 2 | - | 185 | - | 344,300 | - | 1,861 | - |
| | 和去 | 422 | 277 | 261 | 271 | 639,715 | 647,105 | 2,452 | 2,385 |
| 中四国 | 乳去 | 63 | 89 | 262 | 276 | 226,966 | 214,401 | 868 | 777 |
| | F ₁ 去 | 189 | 245 | 311 | 313 | 368,429 | 370,875 | 1,183 | 1,186 |
| | 和去 | 657 | 786 | 285 | 293 | 644,010 | 624,701 | 2,257 | 2,131 |
| 九州・沖縄 | 乳去 | 4 | 32 | 282 | 270 | 195,800 | 204,221 | 696 | 757 |
| | F ₁ 去 | 82 | 236 | 285 | 304 | 396,858 | 377,659 | 1,392 | 1,242 |
| | 和去 | 7,837 | 7,117 | 291 | 295 | 684,058 | 678,742 | 2,349 | 2,298 |
| 全国 | 乳去 | 728 | 864 | 286 | 287 | 234,570 | 235,233 | 820 | 820 |
| | F ₁ 去 | 1,539 | 1,836 | 315 | 314 | 386,148 | 379,758 | 1,226 | 1,209 |
| | 和去 | 13,858 | 12,621 | 293 | 296 | 666,250 | 653,796 | 2,274 | 2,209 |

注：(独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。-は上場がなかったことを示す。関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

19年農業物価指数 肉畜は前年比0.6%上昇

飼料など生産資材でも

農水省がこのほど公表した「2019年農業物価指数」(4面に概要)の農業物価指数(2015年=100)をみると、畜産物のうち肉畜は96.9で、前年よりも0.6%上昇した。乳用肥育交雑種などの肉用牛及び肉豚の価格上昇が主な要因。農業生産資材価格指数(同)は、飼料や肥料などが上昇した。

肉畜の価格指数のうち、乳雄肥育ホルスタイン種は105.8(前年比1.9%上昇)、乳用肥育交雑種は101.7(8.0%上昇)、去勢肥育和牛は106.3(1.1%低下)、雌肥育和牛は105.0(0.3%低下)だった。乳用肥育交雑種は、枝肉相場が堅調に推移したため、大きく上昇した。肉豚は92.2%(1.7%上昇)で前年の下落から小戻した。ブロイラーは97.2(1.0%低下)となっている。

子畜は121.9で0.6%低下。うち、ホルスタイン種雄は161.9(10.3%低下)、交雑種雄は140.5(6.8%上昇)だった。肥育用乳用雄ホルスタイン種は124.9(2.1%低下)、肥育用乳用交雑種は126.1(11.1%上昇)、和子牛雄は118.5(0.2%低下)、和子牛雌は116.8(0.6%上昇)となった。いずれの品種も15年に比べ高値で推移している。子豚は97.2(1.4%上昇)だった。

一方、農業生産資材価格指数は、飼料が97.3で1.2%上昇した。これは、配合飼料が97.4(1.0%上昇)となったこと等による。配合飼料のうち、肉用牛肥育用は98.5(2.6%上昇)だった。そのほか、光熱動力は106.8で0.2%低下したものの、肥料が98.0(3.9%上昇)、建築資材が104.4(2.0%上昇)、農機具が100.8(0.5%上昇)とそれぞれ上昇した。

豚枝肉

家庭内食向け需要の継続で、堅調な相場展開か

7月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が641円(前年同月比114%)、中物は622円(117%)となった。前月に比べそれぞれ18円、20円上げた。新型コロナウイルス感染拡大に伴う家庭内食向け需要の高まりや、全国的に出荷頭数が増えなかったことから、強もちあいの展開となった。

農水省の肉豚生産出荷予測によると、8月は127万5千頭(前年同月比101%、過去5年同月平均比99%)、9月は133万3千頭(104%、102%)と、平年をやや上回って推移するとみている。

農畜産業振興機構の需給予測によると、8月の輸入量は総量で7万1800t

(前年同月比85%)の見込み。内訳は冷蔵品が3万3100t(93%)、冷凍品が3万8700t(79%)。冷蔵品は新型コロナウイルス感染拡大に伴う北米の工場の操業停止等による生産量の減少から、冷凍品は生産量の減少に加え、国内の在庫量が高い水準にあること等から、ともに前年同月を下回ると予測している。

気温が急激に高くなり、肉豚の増体への影響から、出荷頭数が予測より少なくなることが考えられる。需要は、同ウイルスの感染拡大で、肉食向け需要が継続するとみられる。相場は、堅調な展開が予想される。

向こう1ヵ月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が630~660円、中物は580~610円での相場展開か。

素牛

スモール弱もちあひ、乳・和子牛はもちあひか

【乳素牛】7月の乳素牛の全国1頭当たり税込み平均価格(左表、月末の取引結果を除く暫定値)は、乳去勢が23万4570円(前年同月比101%)、F₁去勢は38万6148円(77%)だった。前月に比べ乳去勢は663円下げ、F₁去勢は6390円上げた。乳去勢は横ばいが続き、F₁去勢は5ヵ月ぶりに上げた。

需要期だが、枝肉相場の一段高は見込みにくい。両品種とも、もちあいで推移か。

【スモール】7月の全国22市場の1頭当たり税込み平均価格(農畜産業振興機構調べ、暫定値)は、乳雄が11万3967円(前年同月比85%)、F₁(雄雌

含む)は21万238円(65%)となった。前月に比べそれぞれ2万4598円、1万5621円下げた。両品種とも北海道で値を下げた。

例年、夏場は暑熱ストレスの懸念等から、引き合いが弱まる。両品種とも、弱もちあいの展開が予想される。

【和子牛】7月の和子牛去勢の全国1頭当たり税込み平均価格は、66万6250円(前年同月比83%)となった。前月に比べ1万2454円上げた。枝肉相場が6月から上げに転じ、7月も上昇したことから、子牛価格は2ヵ月連続で上げた。

新型コロナウイルスの感染拡大で、枝肉相場の大幅な上昇は期待できないが、8月は子牛の開催市場数が少ない。もちあいの展開が予想される。